

わが師 マルクス・アウレリウス帝（1）

——カピトリノ博物館にて——

仕事でミラノは何度か訪れたが、不思議とローマを訪れる機会がなかった。昨年、国際会議出席のため、初めてわたしは永遠の都ローマを訪れた。

会議2日目の夜、わたしはディナー・パーティーを断わり、そそくさとカンピドリオ広場に駆けつけた。目当ての博物館は夜8時から11時までしか開いていないので、残念だがパーティーへ出るわけにはいかない。ホテル・ミネルヴァからカンピドリオ広場までは、歩いて数分である。コルドナータと呼ばれる階段を20段ほど上がっていくと、広場に出る。コルドナータも広場もミケランジェロの設計で、広場のタイルには美しい幾何学模様が描かれている。

広場の右手にはコンセルヴァトリー博物館、左側にはカピトリノ博物館があり、いずれも世界最古の公開博物館である。カピトリノ博物館はローマ皇帝の肖像のコレクションで有名である。

カピトリノ博物館の正面に入って、右手に曲がった途端、巨大な騎馬像が目飛び込んできた。あのマルクス・アウレリウス皇帝（121-180）が、右手を差しのべている。20余年、わたしは師との対話を続けてきた。いつかは師に会いたい、それがわたしの念願だった。やっと師に会えた……。

師との出会いは1974年に遡る。

この夏、母を失った心の傷を癒すため、わたしは野辺地を訪れた。野辺地は本州の最北端、下北半島の首根っこにある小さな町である。古くは南部藩の港で、江戸、大阪との交通の要地であったが、今ではその面影はない。

北国の夏の陽の光は意外にも強烈で、野辺地の原野に照りつけていた。炎天下に夏草が生い茂り、草いきれで胸がしめつけられそうだった。夏の浜辺にハマナスの紅紫色の5弁の花が見渡す限り広がっていた。

傷心の旅に、わたしは1冊の文庫本を携えていった。マルクス・アウレリウス帝の『自省録』である。

1年半前、全く何の前触れもなく、母が突然旅先で癌に倒れた。母は小柄で、健康で、快活な人だったが、一面感情の起伏の激しい人だった。わたしは若い時から感情家が嫌いだったので、母とは軋轢が絶えなかった。18才で故郷を離れて以来10年間、母とは疎遠になっ

ていた。

余命は3ヶ月と宣告されたが、60代半ばのせいか、病状は急激には悪化せず小康状態が続いていた。旅先の病院に母を見舞う度に、母はやせ衰え、やや小太りだった面影は全くない。

幼児用の細い点滴針を使い、点滴の速度も極端に遅くしないと体が受け付けない。栄養を補給するため、母は1日中針を刺したままだった。

発熱、体重の極端な減少、しばしば襲ってくる激痛。昔のこととてモルヒネによるペイン・コントロールも開発されていなかった。気丈だった母がうめく。

「痛いなあー、痛いなあー。」

さすがにわたしは暗然たる思いだった。

長い間の感情のもつれがあったので、母の死にもさほど動揺しなかった。というより、むしろ淡々としていたようである。そう父から遠回しに批判された。

しかし、自覚しなかったものの、母の死がもたらした心理的な影響は大きかった。それは3人家族の1人を失った喪失感にとどまらなかった。当たり前だと思っていた日常世界が一瞬で崩れ、虚無の深淵が大きく穴を開け、増殖していくような不安だった。

確固としたものと思い込んでいた世界が、実は「不安定で脆い世界」だった。そう知った。わたしは崖っぷちに立たされた思いだった。「母の死」ではなく、「人間の死」を乗り越えなければならなかった。

——師との出会い——

北国の夏の浜辺で、わたしは『自省録』を読みふけた。

師は自らに語りかける。

いかに多くの医者が何回となく眉をひそめて病人たちを診察し、そのあげく自分自身も死んでしまったことか。……いかに多くの哲学者たちが死や不死について際限なく論議を交わし、そのあげく死んでしまったことか。要するに人間に関することは全ていかに^{かりそ}仮初めであり、つまらぬものであるかを絶えず注目することだ。

たとえ君が3000年生きるとしても、記憶すべきは、「何人も今失おうとしている生涯以外の何物も生きることはない」ということである。従って、最も長い一生も最も短い一生と同じことになる。なぜなら現在は万人にとって同じものであり、

われわれの失うものも同じである。失われる時は瞬時にすぎず、なんびとも過去や未来を失うことは出来ない。自分の持っていないものを、どうして奪われることがありえようか。

「夭折したものも、長寿で亡くなったものも、失うものは同じである。なんびとも現在しか失うものはない。」アウレリウス帝は長い一生も短い一生も同じだというのだ。失うのはいずれも「現在」だけだから。

この言葉に、わたしはほとんど衝撃に近い啓示を受けた。わたしはかつてこれほどの巨視的思索に出会ったことがない。

当時わたしは20代で、必ずしも師の言葉に得心はしなかったが、くり返し読むうちに、わたしは師の人柄に共鳴していった。『自省録』を読み込み、わたしはアウレリウス帝を人生の師と決めた。

師と同じ年代になった今になって、わたしは師の言葉が身に沁みる。師のいわれるように、まさしく人生の時は一瞬にすぎず、その運命は計りがたい。肉体に関するすべては流れであり、靈魂に関するすべては夢である。

——孤高の魂——

わが師は、西暦121年、ローマで生まれた。

当時、ローマは史上空前の世界帝国を形成した。その版図は北はイギリス、南はエジプト、東はメソポタミア、西はスペインに及んだ。この巨大な地中海圏帝国の首都ローマは、当時既に人口100万人を超え、「ローマの平和」と呼ばれる繁栄を誇っていた。

しかし、この繁栄も一皮剥くと、私欲と狂気と権謀術数のドラマの連続であった。自分の馬を神として崇拝するよう強制した精神異常者カリグラ、妻に毒殺されたクラウディウス、ローマに火を放ちながら高歌放吟した暴君ネロ。

このような時代を経て、ローマは2世紀後半の約20年、哲人皇帝マルクス・アウレリウスをいただいた。皇帝は法による統治に務め、その穏健、公平な人柄は死後も長くローマの人々によって守護神として祭られた。

『自省録』はギリシャ語の原題をTAE I S GASUTOMという。40代半ばから58才に病のため死ぬまで、忙しい公務の傍ら書き綴られた。原題は「自己との対話」、「自己への訓戒」を意味するように、もともと公にするためではなく、みずからの為に断片風に

書かれた。その一部は戦陣のテントの中で書かれたという。

権勢並ぶものなき世界帝国の皇帝である。それにも拘らず、師は如何に孤独であったか。

皇帝という色の染まらないよう注意せよ。単純な、善良な、純粋な、品位のある、飾り気のない人間。正義の友であり、神を敬い、好意にみち、愛情に富み、自己の義務を雄々しく行う人間。そういう人間に自己を保て。哲学が君をつくりあげようとした、その通りの人間であり続けるように努力せよ。

他人の厚顔無恥に腹が立つとき、直ちにみずから問うてみよ。「世の中に恥知らずの人間は存在しないということがあるだろうか」と。ありえない。それならばありえぬことを求めるな。

そのような人たちは、世の中にならざる存在する無恥な人びとの1人なのだ。悪漢やペテン師やその他あらゆる悪者についても、同様な考えをすぐ思い浮べるがよい。そういう類の人間が存在しないわけにはいかない。その事を覚えていれば、君はそういう人々にたいして、もっと寛大な気持をいだくようになることができる。

悪人が悪いことをするのを承認しない者は、いちじくの木がその実に酸っぱい汁をつけることや、赤ん坊が泣きわめくことや、馬がいなくなることや、そのほか全ての必然的な事柄を承認しない者に似ている。そういう心の持ち方をしている以上、こうなる他仕方がないではないか。もしイライラするなら、みずからの考え方を直すべきだ。

お前が他人の不忠と恩知らずを責める時に、何よりもまず自分を省みるがよい。人によくしてやったとき、それ以上の何をお前は望むのか。

1800年の時間と空間を超え、わたしはアウレリウス帝と対話する。わが師との対話を通じ、泡立つわたしの心は次第に浄化し、鎮静し、沈潜する。

悲しみの時、苦悩の時、落ち込んだ時、寝つかれない時、わたしは師に相談した。その度に、わたしには師がこんな風に語りかけてくれる様に思える。

おまえの悩みはおまえの特有なものではない。人は皆そうなのだ。わたしは世界

最大の権力者ローマ皇帝である。だが、わたしでさえ、享楽とバラ色の日々を送っているわけではない。むしろその逆なのだ。権力に群がるへつらい者、阿諛する者、小心者、裏切り者、わたしはこれらの者に伍して生きていかなければならない。いかにわたしが嫌おうと、これが人生の実相なのだ。そうである以上、わたしはそれを受け入れなければならない。自分が他人と違うこと、人はそれぞれ他者とは違うこと、まさにこの簡単な事実の中に、人間同士の争いと苦悩の種があり、それは永遠に止むことはない。人生は永遠の苦悩なのだ。それを受け入れよ。

マタイ受難曲が宗教音楽の最高峰であるように、『自省録』は人類が生んだ最も純粋な魂の書である。『自省録』に垣間見られるアウレリウス帝の気高さ、自省心、孤高、高邁な精神は他に比べるものがない。あたかも泥の池に咲く白いスイレンのように、アウレリウス帝の端正なる精神は今も高く凜として輝く……。

（注）参考文献：『自省録』神谷美恵子訳（岩波文庫）。同書を参考としながら、読みやすいよう表記を整えた。